

ストラヴィンスキー:バレエ音楽「プルチネツラ」組曲 (約25分)

Igor Stravinsky: Pulcinella Suite

- |  |   |
|--|---|
| I .シンフォニア<br><i>Sinfonia</i>   | II .セレナータ<br><i>Serenata</i>  |
| III .スケルツィーノ - アレグロ - アンダンティーノ<br><i>Scherzino - Allegro - Andantino</i> | IV .タランテラ<br><i>Tarantella</i>  |
| V .トッカータ<br><i>Toccata</i>   | VI .ガヴォット - 変奏曲I - 変奏曲II<br><i>Gavotta - Variazione I - Variazione II</i> |
| VII .ヴィーヴオ<br><i>Vivo</i>  | VIII .メヌエット<br><i>Minuetto</i>  |
| IX .フィナーレ<br><i>Finale</i>   |   |

イベール:フルート協奏曲 (約20分) ★

Jacques Ibert: Flute Concerto

- |                             |                              |  |
|-----------------------------|------------------------------|--|
| 第1楽章 アレグロ<br><i>Allegro</i> | 第2楽章 アンダンテ<br><i>Andante</i> | 第3楽章 アレグロ・スケルツァンド<br><i>Allegro scherzando</i> |
|-----------------------------|------------------------------|--|

— 休憩 (20分) — Intermission

デュカス:交響詩「魔法使いの弟子」 (約10分)

Paul Dukas: L'apprenti sorcier (The Sorcerer's Apprentice)

ドビュッシー:交響詩「海」 (約24分)

Claude Debussy: La mer

- |  |                                   |  |
|--|-----------------------------------|--|
| I .海の夜明けから正午まで<br><i>De l'aube à midi sur la mer</i> | II .波の戯れ<br><i>Jeux de vagues</i> | III .風と海との対話<br><i>Dialogue du vent et de la mer</i> |
|--|-----------------------------------|--|

指揮: パスカル・ロフェ *Pascal Rophé, Conductor*

フルート: 工藤 重典 *Shigenori Kudo, Flute* (★演奏曲)

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2019 4/19(金)・20(土)・21(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。



これさえ  
見れば  
わかる!

今回の聴きどころ

パリに縁の作曲家、パリで初演された作品

東条 碩夫(音楽評論)

ドイツ音楽の名作を集めての先月の定期演奏会から転じて、今月はすべてパリに縁のある作曲家と作品によるプログラムだ。イベール、デュカス、ドビュッシーはパリで世を去った作曲家だが、ロシア生まれのストラヴィンスキーもまたパリに深い縁があり、特に第1次世界大戦後はパリに本拠を置いて活躍した作曲家であった。

しかも今日演奏される4曲には、すべてパリで初演されたものという共通点がある。新古典主義の作風に転じたストラヴィンスキーがペルゴレージの音楽を端整な筆致で編曲した「プルチネツラ」、イベールの上品な「フルート協奏曲」、デュカスが残したフランスのエスプリともいべき小品「魔法使いの弟子」、そしてフランス最高の作曲家ドビュッシーの傑作「海」――。

19世紀末から20世紀前半にかけてパリを彩ったこれらの素晴らしい作品を演奏するのは、パリ音楽院出身の指揮者パスカル・ロフェと、同じくパリ音楽院に学んでフランス国立リール管弦楽団の首席奏者を務めたこともある工藤重典である。

必聴POINT

ライター  
おすすめ!!



ストラヴィンスキー:バレエ音楽「プルチネツラ」組曲

《これが「春の祭典」と同じ作曲家のもの?》

ストラヴィンスキーが大変身して聴かせる洗練、清澄、優雅。「トッカータ」(第5曲)のリズミカルな躍動、「ヴィーヴオ」(第7曲)のトロンボーンと低弦のユーモア。

イベール:フルート協奏曲

《フランス音楽史上屈指のフルート協奏曲》

これぞフランス音楽の真髄――洗練された音色と響きが全曲にあふれる。第2楽章での夢の世界を彷徨うような雰囲気、第3楽章での洒落た躍動。

デュカス:交響詩「魔法使いの弟子」

《師匠の留守に呪文を使って大失敗した弟子》

習い覚えた呪文で簾に水を汲ませたものの、止めさせる呪文を忘れて部屋は大洪水――簾が動き出すさま、水を汲む姿、渦巻く水、師匠の帰還など、見事な音の描写が聴きもの。

ドビュッシー:交響詩「海」

《リアルな海の描写というより、海のイメージ》

フランス印象派音楽の粋、オーケストラの多彩な音色と微細な表情で描かれる海の音楽。海、波、風、太陽の光などがイメージ的に象徴される見事さ。

# PROGRAM NOTE

曲目解説 —  
演奏をより深く楽しむために  
東条 碩夫(音楽評論)



## ストラヴィンスキー:バレエ音楽「プルチネツラ」組曲

初演:1920年5月15日 パリ

### 20世紀新古典主義音楽を確立した名曲

ストラヴィンスキーは、その生涯に作風を二転三転させたことでも有名であった。1919年から翌年にかけて作曲されたこの「プルチネツラ」も、その最初の転換期に生れた作品である。この曲には、以前(1913年)の「春の祭典」に聴かれたような荒々しい原始主義の作風は、すでに影も形もない。

だが彼に作曲を委嘱したのは、その「春の祭典」などを依頼したのと同じ、「バレエ・リュス(ロシア・バレエ団)」を主宰する伝説的な名プロデューサー、セルゲイ・ディアギレフだった。彼は、イタリア古典の大作曲家ペルゴレージ(1710-36)の作品を基にした、大編成の管弦楽付きのバレエ音楽を作りたいと思ったのだ。しかし、作風を転換させていたストラヴィンスキーはそれに構わず、小編成による端整な洗練された音楽を書き、ディアギレフらを驚かせてしまう。

そのような紆余曲折はあったものの、この「プルチネツラ」は、パリのオペラ座で初演された。その時の指揮はエルネスト・アンセルメ、振付はレオニード・マシーン、そして舞台美術を担当したのは、あのパブロ・ピカソであった。

バレエの筋書は、イタリアの古典喜劇のスタイルに拠ったもの。オリジナルはソプラノとテノー



作曲家プロフィール **イーゴリ・ストラヴィンスキー (1882-1971)**  
*Igor Stravinsky*

ロシアに生まれ、のちフランスの、次いでアメリカの国籍を得た20世紀最大の作曲家のひとり。初期には「春の祭典」に代表される激烈な「原始主義」の作風で音楽界を震撼させたが、第1次大戦後は端整な新古典主義作風(「プルチネツラ」「エディプス王」「妖精の接吻」「3楽章の交響曲」など)に転じ—この時期、パリに在住したこともある—最晩年にはそれまで批判していた十二音技法をも宗教的作品などの中に控えめながら取り入れるという作風をも示した。

ルのソロも入る18曲からなっているが、ストラヴィンスキーは1924年に、オーケストラのみによる、8曲からなる組曲版(1947年に改訂)をつくった。ここに演奏されるのがそれである。どの曲も、実に清涼な音色で美しい。因みにこの「プルチネツラ」には、ヴァイオリンとピアノに編曲された版(「イタリア組曲」と呼ばれる)もある。

楽器編成

独奏ヴァイオリン2、独奏ヴィオラ、独奏チェロ、独奏コントラバス、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、バスーン2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、弦楽5部

## イベール:フルート協奏曲

初演:1934年2月25日 パリ

### イベール中期の傑作

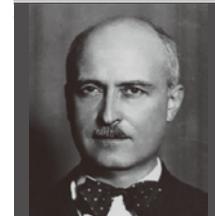
ジャック・イベールは、日本には1940年(昭和15年)の「紀元2600年記念行事」のための委嘱作品「祝典序曲」(のち改訂)で深い縁のある作曲家ではあるが、そのわりに一般に親しまれる存在とはなっていない。彼の作品の中で今日、広く人気があるのは、異国情緒豊かなオーケストラ曲「寄港地」(1922年)と、この品のいい「フルート協奏曲」であろう。

これは1932年から翌33年にかけて作曲され、フランスの有名なフルート奏者マルセル・モイーズに献呈された。初演で演奏したのは、そのモイーズと、当時の高名な指揮者フィリップ・ゴーベール及びパリ音楽院管弦楽団である。

曲は3楽章からなり、叙情的なアンダンテ(ゆっくりと)の第2楽章と、闊達な前後の2つの楽章—アレグロ(快速に)の第1楽章、アレグロ・スケルツァンド(快速に、やや諧謔的に)の第3楽章とからなる。イベール特有の緻密で簡明で、適度な均衡を保ち、奇を衒うことのない曲想が特徴だ。

楽器編成

独奏フルート、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット、ティンパニ、弦楽5部



作曲家プロフィール **ジャック・イベール (1890-1962)**  
*Jacques Ibert*

パリに生まれ、パリに没した作曲家。パリ音楽院に学び、のちローマのフランス・アカデミーの院長を務め、晩年にはパリに戻って国立歌劇場協会の総監督(行政官とした資料もある)を短期間ながら務め、フランス学士院会員ともなった。若い頃、第1次世界大戦に従軍したが、その時の体験が彼の代表作「寄港地」のエキゾチックな曲想を生んだと言われる。因みに、シャリアピンが主演したバブスト監督の映画「ドン・キホーテ」の音楽を担当したのはイベールであった。

## デュカス:交響詩「魔法使いの弟子」

初演:1898年5月1日 パリ

## 原作は文豪ゲーテが書いたバラード

1897年の作で、デュカスの名を広く知らしめた名曲。ディズニー製作の映画「ファンタジア」の中で使われていたのをご記憶の方も多だろう。ゲーテが書いた韻文形式のバラードを、アンリ・ブラツがフランス語に訳し、それに基づく標題音楽としてデュカスが作曲したのが、このユーモアに富んだ作品なのである。

物語は——師匠の留守に、弟子が習い覚えた呪文を使って箒に水を汲ませ、大甕おおがめを満たすべく運ばせ始めるが、なんと、それを止めさせる呪文をはっきりと覚えていなかった!見る見るうちに水は溢れ、部屋は水浸しになっていく。業を煮やした弟子は箒に斧を投げつけ、それを真つ二つにして事は収まったかに見えたが、なんと今度は、その二つになった箒の各々が物凄い勢いで水を汲み始めた。今や部屋は大海のごときありさまである。切羽詰まった弟子は悲鳴を上げる。そこへ師匠が帰って来た。師匠の大喝一声、箒はやっともとの姿になり、水は止まった……。

原詩はここまでだが、音楽には序奏と同じ静かなコーダ(終結)が付き、叩きつけるような最強奏で終る。映画「ファンタジア」では、師匠の前でしよげ返る弟子(ミッキー・マウス)と、それを外へ叩き出す師匠の怒りの一撃が、その音楽と完璧に合致していた。

音楽の形式としては、「序奏とコーダのついた交響的スケルツォ(諧謔曲)」ということになる。デュカスの書いた音楽の色彩の豊かさ、表情の鮮やかさには、感服のほかはない。

## 楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バス・クラリネット、バスーン3、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、グロッケンシュピール、トライアングル、ハーブ、弦楽5部



## 作曲家プロフィール ポール・デュカス (1865-1935)

Paul Dukas

「Dukas」は「デュカ」と表記される場合もある。パリに生まれ、パリに没したフランスの作曲家で、パリ音楽院の教職にも就き、音楽学者としても実績を残した。代表作は「魔法使いの弟子」と晩年のバレエ曲「ペリ」(その「ファンファーレ」はしばしば単独で演奏される)くらいにとどまるが、特に前者の管弦楽法は高く評価され、ストラヴィンスキーやドビュッシーにも影響を与えているといわれる。完全主義的な気質の持主で、限られた作品しか出版を認めなかった。

## ドビュッシー:交響詩「海」

初演:1905年10月15日 パリ

## フランス印象派音楽の傑作

「海」を描くのは、クラシック音楽の得意技である。古今、多くの作曲家が海を描き、あるいは海に困んだ音楽を書いている。ヴィヴァルディの「海の嵐」、メンデルスゾーン「フィンガルの洞窟」、ワーグナーの「さまよえるオランダ人」、リムスキー=コルサコフの「シェエラザード」、等々——。

だがドビュッシーは、他の作曲家のように、海や波をあからさまに描くことはしない。描写というよりも「象徴」なのである。この曲の直前に書かれた印象主義オペラの傑作「ペレアスとメリザンド」にも海岸の場面があるが、そこでは「風が出てきた」という歌詞の個所でさえ、音楽は微かなイメージだけで「海」を暗示する、という手法なのである。

この交響詩「海」にも、第1楽章に「海の夜明けから正午まで」、第2楽章に「波の戯れ」、第3楽章に「風と海との対話」という題名がつけられているが、それはやはり、具体的な波の音の模倣などよりも、感覚的なイメージで海を想像させる、といった手法に近いだろう。すべては大オーケストラによる和声や音色の変化の妙に任されているのである。

作曲は、1903年8月ごろから、1905年3月5日までの間に行なわれた。初版のスコアの表紙には、葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」の一部が印刷されていたが、必ずしもこの絵に触発されて作曲したというわけでもないようである。

## 楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスーン3、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット5、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、トライアングル、ハーブ2、弦楽5部



## 作曲家プロフィール クロード・ドビュッシー (1862-1918)

Claude Debussy

サン=ジェルマン・アン=レーに生まれ、パリで没したフランス最大の、20世紀最高の作曲家のひとり。フランス印象派音楽の代表的存在でもある。「後世の作曲家で、ドビュッシーの影響を受けていない者はほとんど見られない」(ニューグローヴ世界音楽大辞典)という指摘もあるほど、音楽史における彼の存在は大きい。オペラ、管弦楽曲、室内楽曲、声楽曲など全てのジャンルにわたってすぐれた作品を残している。